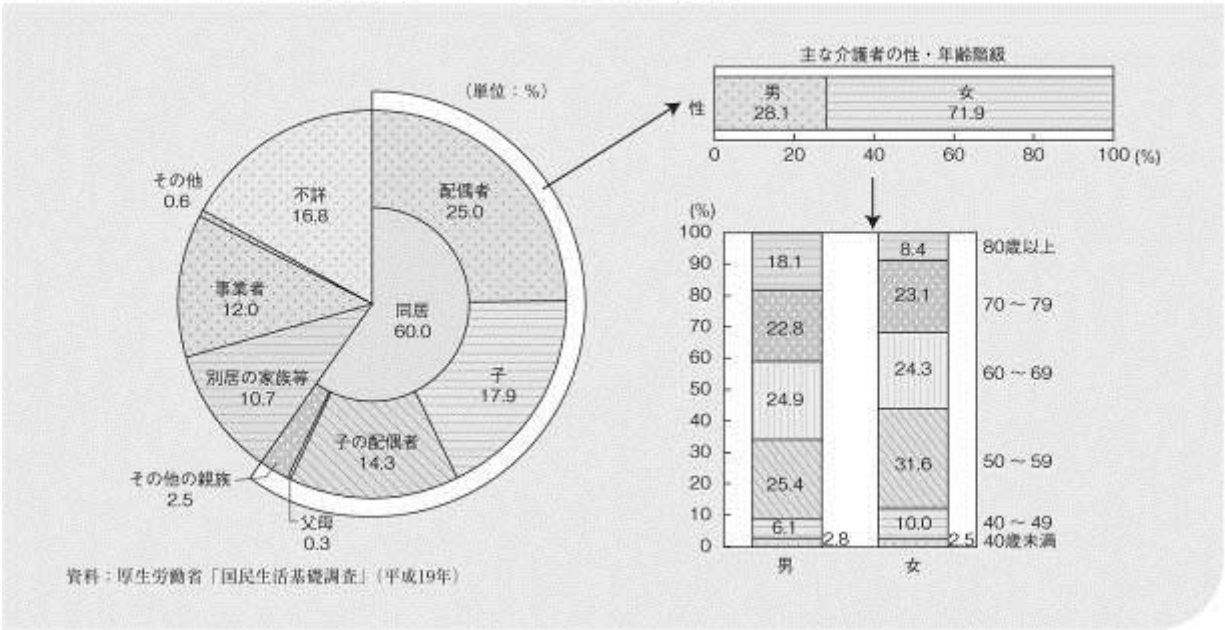
次は、どういう方が介護をしているかを書いたものです（図1－2－3－15）。

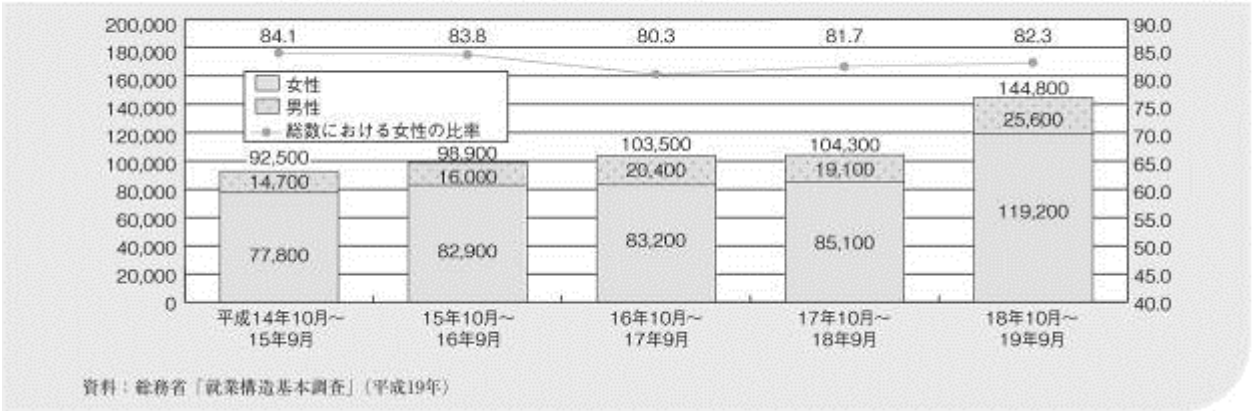
図1－2－3－15　要介護者等からみた主な介護者の続柄



要介護者からみた主な介護者の続柄を見ると、まず同居の家族が6割です。その中で配偶者が一番多くて25%、次いで子ども、子どもの配偶者です。これを括って性別で見ると、7割は女性がやっています。年齢別で見ると、男性でも女性でも、すでに60歳以上の方が介護者の過半数で、いわゆる老老介護のケースが相当多くなっていると言えると思います。

その下に、最近、介護離職――介護のために仕事を辞めてしまう方の存在も問題になってきているので、介護を理由に離職をした方の数字を拾ってみました（図1－2－3－16）。

図1－2－3－16　介護・看護を理由に離職・転職した人数

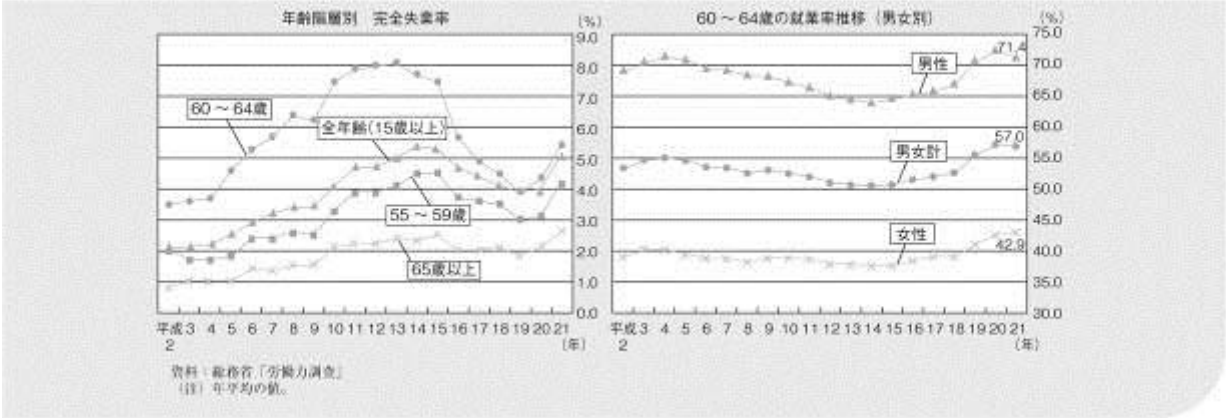


これを見ると、一番新しいデータで、１年間に14万4,800人が家族の介護や看護を理由に離職・転職をしています。その約8割は女性なのですが、男性も2万5,600人と、少なからぬ方が離職・転職を余儀なくされています。

4） 高齢者の就業

13ページは高齢者の就業関係です。今、高齢者の雇用については政策的に、定年年齢や継続雇用の年齢を65歳まで段階的に延ばしていくことで進めています。長期的にはその効果が出て、60代前半の就業率はかなり上がってきています。ただ、足元では景気が悪いせいで少し下がっています（図1－2－4－7）。

図1－2－4－7　年齢階級別にみた完全失業率、就業率



高齢者雇用は進んでいるのですが、今、政策的に進めているのは、企業が定年を65歳まで引き上げるか、あるいは継続雇用・再雇用をする制度です。今の制度では、全員を再雇用・継続雇用しなさいとまでは言っていないので、中には継続雇用されない方もいます。ただ、それでは先々、年金とのすき間が空いてしまうかもしれないので、そこをどうしようかという議論が、これから進展していくのではないかと思います。

5） 高齢者の社会参加活動

14ページは、社会活動の関係です。これは後ほど関係のものが出てくるので省きます。

15ページに、コラムの抜粋を書いています。ここでは男性介護者の活動について取り上げてみました。介護をする人のネットワークは、女性を主体としたネットワークは以前からあったのですが、最近の動きとして、男性介護者が中心の集まりがいくつか出てきています。それを全国でつなげるチャレンジが行なわれて、平成21年3月に、男性介護者と支援者の全国ネットワークが立ち上げられました。これは立命館大学の津止先生がやっていらっしゃいます。ネットワークをするにも、男性介護者の会の数自体がまだまだ少ないと思うのです。ただ、今の段階ですでに『男性介護体験記』を発行して、152人の男性介護者の体験を集めています。

このネットワークを立ち上げた津止先生のお話を、私も一度伺ったことがあります。意外だったのは、こういう運動をやっていらっしゃる方は、特に我々役人に対してはまずその制度・政策をこういう風にしてほしいと要望するのが通常なのですが、津止先生はそういうことをほとんどおっしゃらない。男性介護者は一番何を希望しているのかとお聞きすると、「まず自分の話を聞いてほしい。それが男性介護者の一番の願いです」とおっしゃるのです。こ

ういったネットワークなり介護者の会で、お互い話を聞き合うこともしていらっしゃいます。

津止先生から言われたのは、男性が介護をする立場になった時、予期せずそういう立場を迎える方がほとんどで、それがショックを大きくしていて、なかなか頭を切り替えて介護に取り組むことができないでいる。まず男性も自分がいつかは介護をすることがあるかもしれないという、イメージトレーニングではないのですが、そういった経験をすることが大事で、そのためにも現に介護をされている男性の話を男性が聞くのがいいのではないか。例えば企業でやる退職準備のセミナーで男性介護者を呼んで、話を聞く機会を作れないかという提案をいただきました。それを聞くまでそういうニーズがあると思わなかったので、目から鱗が落ちる思いがしました。

III.　高齢者の社会的孤立と地域社会

次の第3節が、今回の特集の「高齢者の社会的孤立と地域社会」です。

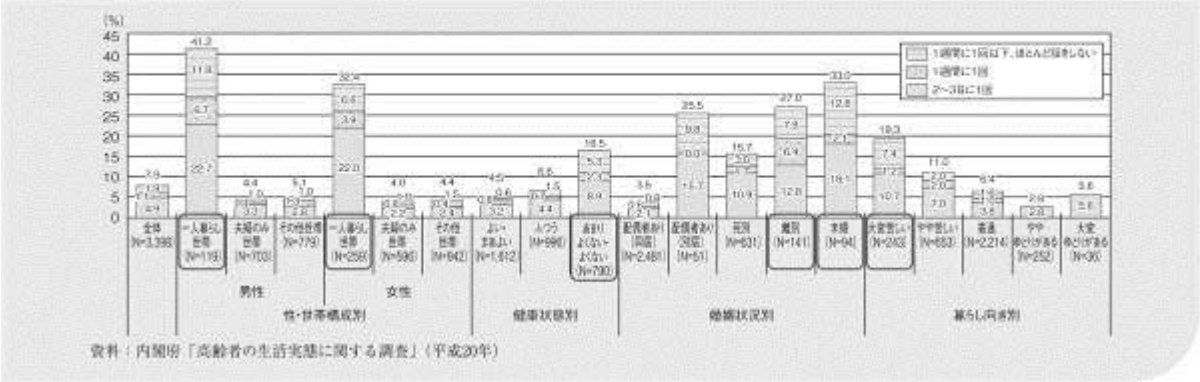
社会的孤立についての情報は、例えばNHKが「無縁社会」という特集を組むなど、かなり注目されてきていると思います。そういった問題提起は色々な所でされていて、それはそれで非常に重要だと思います。ただ、この「白書」では、ただの問題提起で終わりたくないと思い、その気持ちを副題に込めました。～「孤立」から「つながり」、そして「支え合い」へ～です。暗い話が多いのですが、最後には何かしら今後の希望を持っていただけるようなものにしたい、という気持ちを込めて作りました。

1)　社会的孤立に陥りやすい高齢者の特徴

この「白書」を作ることを念頭に置きながら、内閣府でいくつか調査をしました。高齢者の生活実態に関する調査がメインです。そこで孤立をしているかどうかの状況を調べようと思ったのですが、何を尺度にしたらいいのかと思ったのです。1つは会話の頻度。もう1つは困った時に頼れる人がいるかどうか。もう1つは友人や近所との付き合い。この3つをとりあえず尺度として調べてみようと思いました。そうしたところ、かなりはっきりした傾向が見られたのではないかと思います。

まず男性の一人暮らしの方の4割が、週に2、3回、あるいはそれ以下しか話をされていないという状況です（図1－3－1）。

図1－3－1　〈会話頻度〉あなたは普段どの程度、人（同居の家族を含む）と話しますか？（電話やＥメールも含む）

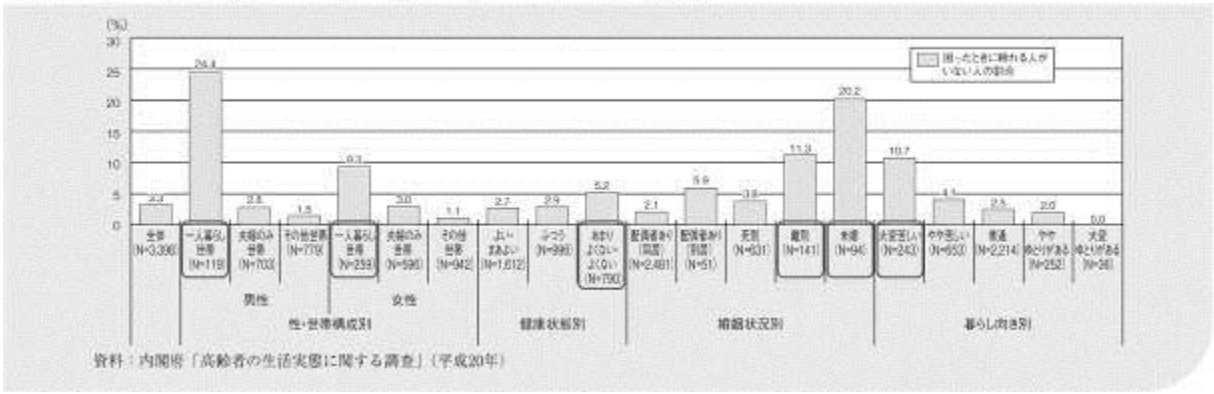


資料：内閣府「高齢者の生活実態に関する調査」（平成20年）

余談になりますが、私はフランスに留学していたことがあります。語学が本当にできなかったので日常会話がなく、まさに週に2、3回しか人と話をしない状況がしばらく続いたことがありました。役所が嫌で留学したようなところがあったのですが、行ってみて初めて「役所は実は温かい、いい所だったな」と思うぐらい、会話ができないのは人の気持ちを弱くすると思いました。ですから、そういう方が4割もいる男性の一人暮らしの方は本当に心配です。おしゃべりな女性でも一人暮らしになってしまうと、3割の方が会話の頻度が相当少なくなります。あとは健康状態の良くない方、あるいは離婚を経験した方や未婚の方も会話が少ないです。もう1つ心配なのは、暮らし向きが苦しい方です。大変苦しいという方の中では、2割ぐらいの方が会話の頻度が少ないということになっています。

その下のグラフ、頼れる人がいない人の割合も大体似たような傾向です（図1－3－2）。

図1－3－2　困ったときに頼れる人がいない人の割合

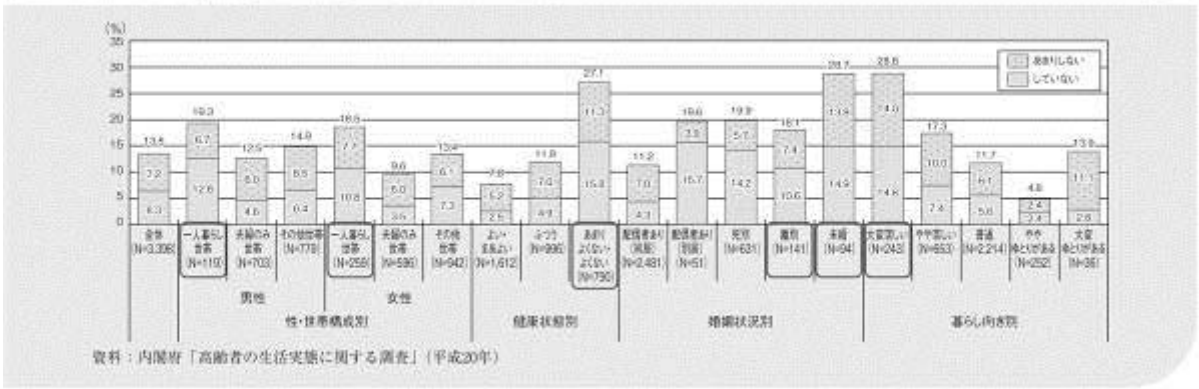


資料：内閣府「高齢者の生活実態に関する調査」（平成20年）

これも男性の一人暮らしが突出していて、24.4%が頼れる人がいません。それから暮らし向きが苦しい方です。本来は頼れる人が必要な方ですが、頼れる人がいません。未婚の方も2割ぐらいです。

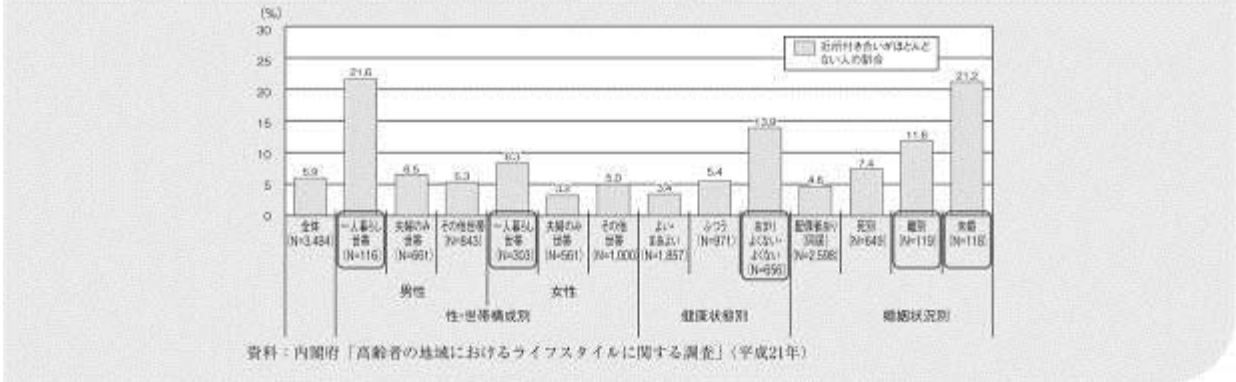
次に友人との付き合いです（図1－3－3）。

図1－3－3　友人との付き合いについて



家族がいないと、逆に友人との付き合いは自由にしやすいというメリットがあるといいと思うのですが、このグラフを見る限りそれは逆で、むしろ家族がいない方は友人との付き合いも少ないという結果になっています。その下のグラフは近所との付き合いですが、一人暮らしの男性の2割は近所付き合いがほとんどなく、未婚の方もそういう方が多くなっています（図1－3－4）。

図1－3－4　ふだん、近所の人との付き合いがほとんどない人の割合



家族関係と友人関係と地域関係は、持っている人はすべて持っていて、残念ながら、ない人はすべてないという傾向が、ここから見られると思います。

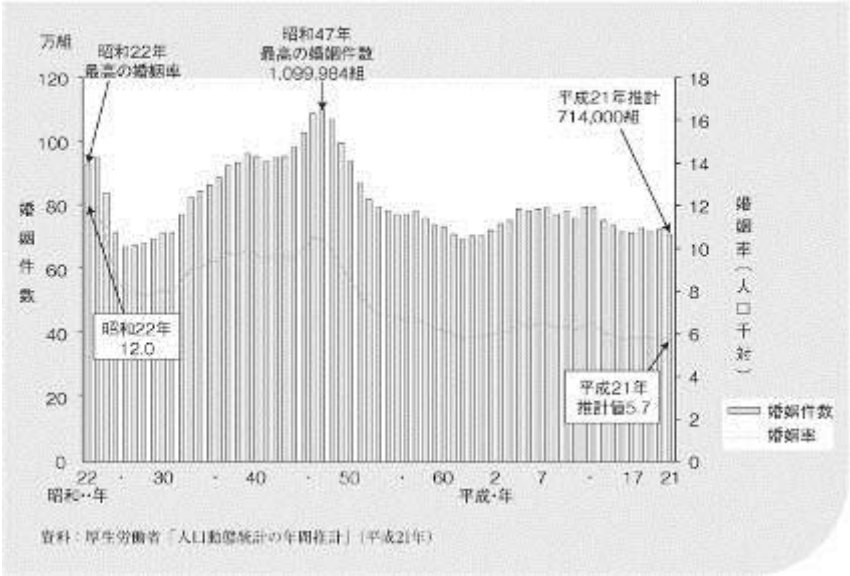
2)　高齢者の社会的孤立の背景

高齢者全体としては比較的状況は悪くありません。その1つの要因としてあるのは、今の高齢者の方は離婚したり未婚で過ごした方が数としては少ないということです。全体で3,398人に調査をしていて、その中で未婚の方は94人だけです。離別の方は141人でした。そういう経験のある方は孤立しがちなのですが、全体ではまだ少数なのです。

ただ、今後についてはどうか。17ページに、婚姻率が下がっているグラフ、あるいは離

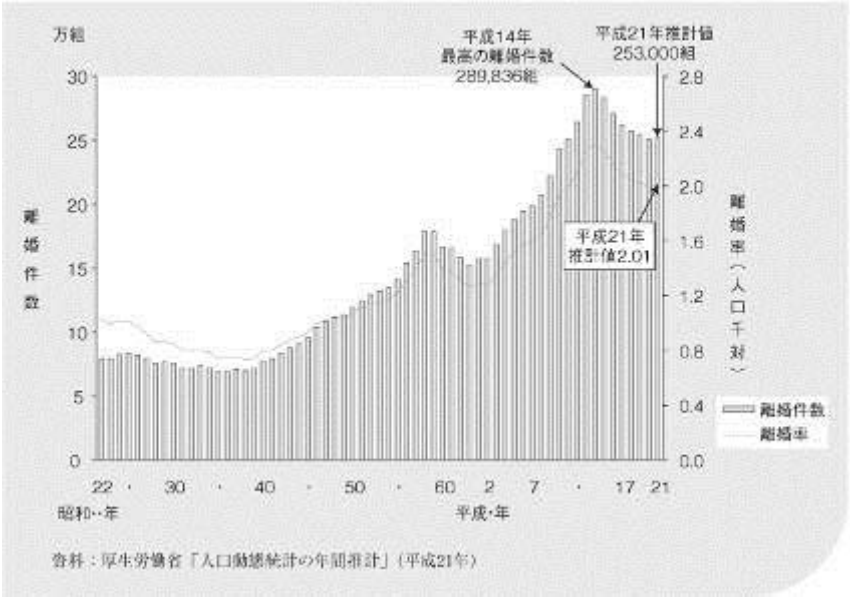
婚が急増しているグラフを入れていますが、今の高齢者の孤立問題は実はほんのまだ序の口で、今の未婚・離婚の増加を考えると、これからまさにこの部分は深刻化していくと思います（図1－3－5、図1－3－6）。

図1－3－5　婚姻件数及び婚姻率の年次推移



資料：厚生労働省「人口動態統計の年間推計」（平成21年）

図1－3－6　離婚件数及び離婚率の年次推移



資料：厚生労働省「人口動態統計の年間推計」（平成21年）

これから子どものいない方、まして孫のいない方はどんどん増えていきますが、そこでは1960年生まれで、生涯子どもがいないであろう人は18%なのです。ここからさらに30年下の1990年生まれの世代は、子どものいない人が37%になるだろうと言われています。さらに孫のいない人が半分ぐらいになるということで、血縁の家族を持たない形がどんどん増え